

国際試合におけるインクルーシブスポーツの調査研究 —Sainsbury's Birmingham Grand Prix大会の状況—

Research into inclusive sports in international athletics meetings
—The meeting situation for Sainsbury's Birmingham Grand Prix—

井上明浩
Akihiro INOUE

〈要旨〉

2014年8月24日にイギリス・バーミンガム市のアレキサンダースタジアムにおいて、IAAFダイヤモンドシリーズグランプリとIPCグランプリファイナルが、同時開催された。この大会は、オリンピック出場レベルの選手とパラリンピック出場レベルの選手が、同じ時間同じ場所で同一大会に出場するというまさに陸上競技界のエリートアスリートによるインクルーシブスポーツが実現されたと言えよう。我が国においても、まず障害者陸上競技団体を統合し、健全者の競技団体の傘下に加盟することが望まれる。これが実現すれば、飛躍的に障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。さらにはインクルーシブスポーツが、地域スポーツの核として推進されることにより、障害の有無や年齢、性別、体力、運動能力、運動・スポーツに対する関心、意欲、態度等を問わずすべての人にひらかれたスポーツ環境の整備につながるのである。

〈キーワード〉

インクルーシブスポーツ、陸上競技団体、アダプテッドスポーツ

1. はじめに

2014年8月24日にイギリス・バーミンガム市のアレキサンダースタジアムにおいて、IAAF (International Association of Athletics Federation) ダイヤモンドシリーズグランプリとIPC (International Paralympic Committee) グランプリファイナルが、同時開催された。この大会は、オリンピック出場レベルの選手とパラリンピック出場レベルの選手が、同じ時間同じ場所で同一大会に出場するまさに陸上競技界のエリートアスリートによるインクルーシブスポーツが実現されたと言えよう。この大会の出場にあたっては、IPCからの招待選手という形であり、日本パラリンピック委員会⁽¹⁾ (JPC: Japan Paralympic Committee) が窓口となり、日本パラ陸上競技連盟 (JPA: Japan para Athletics) および日本知的障害者陸上競技連盟 (JIDAF: Japan Intellectual Disability Athletics Federation) が選手の派遣を行った。まず選考にあたっては、IPCから直近のグランプリレースや世界選手権の結果から算定された世界ランキング6位以内および世界的有名選手が招待を受けるといった形になっている。今大会は、選手3名役員1名、日本選手団計4名で編成され

た。同大会は、世界52カ国から男性選手145人、女性選手138人、計283人が参加した。筆者は、個人的に1980年代後半から約25年以上に亘ってボランティアコーチとして知的障害者スポーツに関する活動に携わっている。この間、国際パラリンピック委員会が関与する競技スポーツの国際大会には、1992年マドリッドパラリンピック (スペイン・マドリッド) を皮切りに、2000年シドニーパラリンピック (オーストラリア・シドニー) などのコーチや監督、団長とし



Sainsbury's Birmingham Grand Prix 24 August 2014
Alexander Stadium: スタンドを埋める満員の観客

て数多くの国際大会を経験してきた。この度、筆者自身日本選手団コーチとして参加の機会を得たので、その状況を報告する。

パラリンピックについては、「内容を知っている（詳細認知）」または「見たり聞いたりしたことがある（名称認知）」を合わせた国内認知度は98.2%であり、他の障害者の国際的なスポーツの祭典である大会（スペシャルオリンピックス⁽²⁾19.8%、デフリンピック⁽³⁾11.2%）よりは、その知名度は高いと言えよう。⁽⁴⁾しかしながら、障害者スポーツにおいても、健常者スポーツ同様に各競技別に世界選手権大会が毎年世界中のどこかで盛んに行われているが、それらはパラリンピックに比べると、国内ではまだまだその知名度や認識は薄いと言える。ましてや障害者の陸上競技のグランプリファイナルなどの情報は、関係者周辺内で終了してしまう状況であろう。そのような中、今年9月に開催されたIPC公認2014ジャパンパラ陸上競技大会は、今回で24回を数え、高い標準記録が設定されているにもかかわらず、数多くの選手が出場しおり、競技力の高い見ごたえのある試合が繰り広げられたが、一般観客はほとんど見られないのが現状である。

今年、1964年東京パラリンピック50周年にあたる。今年4月にスポーツ行政の一元化の手始めとして、これまで障害者スポーツは厚生労働省管轄であったが、文部科学省へ移管された。また新たに次年度スポーツ庁が創設の見込みである。その流れは、インクルーシブスポーツが世界的にも注目され始めたからである。今後そのような活動がどのように普及、発展していくか、現時点で展望したい。

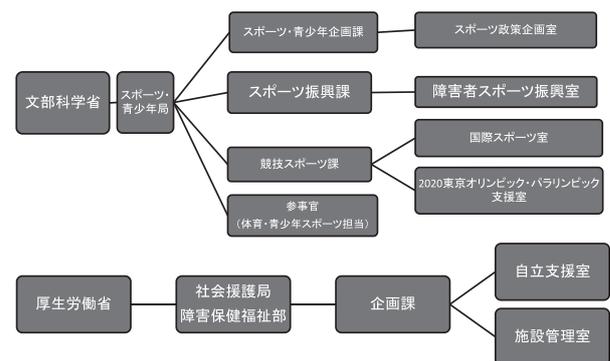
2. インクルーシブスポーツとは

2-1 インクルーシブスポーツの源流

1959年デンマークのバンク・ミケルセンが提唱したノーマライゼーション（等生化）の思想⁽⁵⁾がその源流となっている。その後、ドイツで生まれアメリカに移住したヴォルフエンズベルガーは、1977年ノーマライゼーションの理念をアメリカに導入したのち、ソーシャルロールバロリゼーション（社会的役割の実現）という概念⁽⁶⁾を用い、障害がある人たちの人間としての固有の価値の大切さを主張し、メインストリーミング（主流化）を提唱して、社会の中で中心的な存在となることを施策に反映させた。さらに1979年イギリスにおいて、ウォーノック報告が発表されインテグレーション（統合化）が進められるようになった。そしてこれらは、この社会において障害者と健常者が二項分立的に存在しており、その間にある壁を取り除こうとするバリアフリーという思想につながる。その後、1994年スペインのサラマンカにおいて、ユネスコとスペイン政府によって開催された特別ニーズ教育世界会議において、サマランカ

宣言が採択され、インクルーシブ教育が促進された。これはつまり、個々人が持つ多様な価値観を認める「みんな違ってみんないい」という考え方であり、すべての人間それぞれ違いがあり、障害のある人もいて当たり前であり、包括や共生社会実現に向けた本格的な取り組みの推進を意味する。つまりバリアフリーではなく、これまでの福祉の理念を上回るような発想である。我が国のインクルーシブ体育・スポーツについては、2000年に厚生省（当時）でまとめられた「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」には、社会的に弱い立場にある人々を社会の一員として包み支え合う、ソーシャルインクルージョンの理念を進めることを提言している。そして2014年国連・障害者権利条約に141番目に批准し、「障害の有無にかかわらず、人々が共に暮らすためにはそれなりの配慮が必要」という捉え方が一般的であるとし、2011年に施行されたスポーツ基本法では、先述のとおり初めて障害者スポーツの推進が掲げられた。実際には、草野⁽⁷⁾、金山⁽⁸⁾、山本⁽⁹⁾、山本⁽¹⁰⁾の研究に見られるとおり、インクルーシブ体育・スポーツの実践例が報告されている。

国の障害者スポーツ関係組織（一元化）2014.4月



障がい者スポーツInfo2014「我が国における障害者スポーツ推進の動向」(文科学)

スポーツ行政一元化の形態

2-2 日本国内での障害者陸上競技団体と健常者陸上競技団体のインクルーシブスポーツの現状

我が国における障害者陸上競技団体は以下の通り各障害種別に応じた形で4団体が存在する。例えば、特定非営利活動法人日本知的障害者陸上競技連盟は、本部を千葉県山武市に置き、日本知的障害者陸上競技選手権および日本知的障害者フルマラソン選手権大会、その他ジュニア対象の地域大会等を主催し、さらに選手強化合宿や選手発掘、普及事業、指導者養成事業などを毎年行っている。このように他団体もほぼ同様に、それぞれに日本選手権等の主催や選手強化、普及、指導者養成等の事業を行っている。そして各団体がそれぞれに(公財)日本障害者スポーツ協会並びに日本パラリンピック委員会に加盟をしており、各主催事

業においては、連携や協力はほぼ皆無に近い状況である。さらに、(公財)日本陸上競技連盟との連携、協力もほとんど見られない。

障害種別陸上競技4団体

- ・ 一般社団法人日本パラ陸上競技連盟
- ・ 認定特定非営利活動法人盲人マラソン協会
- ・ 日本聴覚障害者陸上競技協会
- ・ 特定非営利活動法人日本知的障害者陸上競技連盟

1991年に第1回ジャパンパラリンピック陸上競技大会が、東京都江戸川区営陸上競技場で開催され⁽¹⁾、今回で14回を数える。今年も、9月にIPC公認2014ジャパンパラ陸上競技大会が山口県山口市の維新百年記念公園陸上競技場で開催⁽²⁾された。この大会は、(公財)日本障がい者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会主催であるが、数年前から上記の盲人マラソン協会を除く3団体の共催で開催されている。一方、昨年まで任意団体の日本身体障害者陸上競技連盟が、今年3月一般社団法人日本パラ陸上競技連盟として新たに発足した。将来構想として、現状の4団体の統合を視野に入れた改称および組織改編であることが予測できる。このようにこれまで障害種別に存在していた障害者陸上競技団体であるが、諸外国では実現している各競技における中央競技団体への障害者スポーツ団体のインクルーシブスポーツの様相⁽³⁾⁽⁴⁾を視野に入れた統合の潮流の兆しが見えて来る。

3. IAAFダイヤモンドリーグ (IAAF Diamond League) とIPCグランプリ (IPC GRND PRIX) 概要

3-1 今年度の大会日程、開催地

ダイヤモンドリーグは、IAAFが主催する14戦の陸上競技大会で構成される最高峰のリーグ戦で2010年に新設された。各大会は例年5月から9月にかけてヨーロッパ、北アメリカ、アジアの11カ国14都市で開催される。男女各16種目の選手が年間総合成績を競い、優勝者には賞金とダイヤモンドトロフィーが授与される。

2014年ダイヤモンドリーグ開催月日及び場所⁽⁵⁾

| | | | | |
|-------|----|--------|----------|---------|
| 第1回大会 | 5月 | 9日 | Doha | カタール |
| 第2回大会 | 5月 | 18日 | Shanghai | 中国 |
| 第3回大会 | 5月 | 31日 | Eugene | アメリカ合衆国 |
| 第4回大会 | 6月 | 5日 | Roma | イタリア |
| 第5回大会 | 6月 | 11日 | Oslo | ノルウェー |
| 第6回大会 | 6月 | 14日 | New York | アメリカ合衆国 |
| 第7回大会 | 7月 | 3日 | Lausanne | スイス |
| 第8回大会 | 7月 | 5日 | Paris | フランス |
| 第9回大会 | 7月 | 11-12日 | Glasgow | イギリス |

| | | | | |
|--------|----|-----|------------|--------|
| 第10回大会 | 7月 | 18日 | Monaco | モナコ |
| 第11回大会 | 8月 | 21日 | Stockholm | スウェーデン |
| 第12回大会 | 8月 | 24日 | Birmingham | イギリス |
| 第13回大会 | 8月 | 28日 | Zürich | スイス |
| 第14回大会 | 9月 | 5日 | Bruxelles | ベルギー |

グランプリは、IPCが主催する9戦の陸上競技大会で構成される最高峰のリーグ戦で2013年に新設された。今年は2月から8月にかけてアラブ、アジア、南米、ヨーロッパ、アフリカの9カ国9都市で開催された。優勝者には賞金が授与される。

2014年IPCグランプリレース開催月日及び場所⁽⁶⁾

| | | | |
|-------|------------|------------|----------|
| 第1回大会 | 2月22-25日 | Dubai | アラブ首長国連邦 |
| 第2回大会 | 4月14-16日 | Beijing | 中国 |
| 第3回大会 | 4月24-26日 | Sao Paulo | ブラジル |
| 第4回大会 | 5月9-11日 | Arizona | アメリカ合衆国 |
| 第5回大会 | 5月16-18日 | Nottwil | スイス |
| 第6回大会 | 5月30日-6月1日 | Grosseto | イタリア |
| 第7回大会 | 6月16-18日 | Tunis | チュニジア |
| 第8回大会 | 6月20-22日 | Berlin | ドイツ |
| 第9回大会 | 8月24日 | Birmingham | イギリス |

3-2 Sainsbury's Birmingham Grand Prix 大会概要

大会は、2014年8月24日(日)世界の22の国から230人が参加し、イギリスのバーミンガムで開催された。バーミンガムは、イギリス連邦の中央部に位置し、人口は229万人でイギリス第二の都市である。

現地を訪れてまず感心したことがある。選手村に指定されたのは、IAAFダイヤモンドシリーズの出場選手達の選手村に隣接する同等の一流ホテルが充てられたことである。その大会に出場している選手はオリンピックとパラリンピックレベルの所謂一流の選手達である。ロビーには、各々の専用デスクが置かれており、大会に関する様々な情報やサポートがそこでは受けられる。ホテル内ではロビーをはじめ、レストランやバー、廊下や玄関、庭などいたるところで双方の選手や役員が顔を合わせる。つまり、陸上競技の世界レベルの選手達は、障害の有る無しで全く区別されていないということを物語っている。現在の日本では、健常者と障害者の世界レベルの大会が、同じ都市で開催された場合、選手村を分けて設営すると思われる。まだまだ障害者スポーツと一般スポーツの間には見えない壁が存在しているように感じられる。

3-2-1 日程について

今回は、選手3名コーチ1名ということもあり、選手団としてはまとめて渡航するという形ではなかった。8月21日(木)22日(金)に成田空港から選手が1名ずつ、同月22日(金)に選手2名コーチ1名が関西空港を出国し、両空港からアムステルダム経由で現地入りした。22日(金)はアクレディテーション¹⁷⁾並びに練習日、23日(土)監督会議、24日(日)は開会式その後競技会、そして25日(月)は選手団退村現地出国、翌8月27日(火)帰国という日程であった。

競技会は、24日(日)1日のみで行われ、午後1時20分開始、6時55分終了というプログラムである。具体的な競技種目は以下のとおりである。

○IAAFダイヤモンドリーグ

男子 100m, 200m, 400m, 600m, 3000mSC, 2miles
走幅跳, 走高跳, 円盤投げ

女子 100m, 400m 100mH, 400mH, 800m, 2miles
棒高跳, 三段跳, 砲丸投, やり投

○IPCグランプリ

男子 T34,43/44 100m T42 200m
T20,52/24 1500m T11/12 走幅跳

F54/55 砲丸投 F42/44 円盤投

女子 T11/12,34,43/44 100m T37/38 400m
T53/54 1500m T42/44 走幅跳

3-2-2 競技場について

会場となったアレキサンダー競技場は、1975年にオープンして、これまでイギリス陸上競技連盟のホームスタジアムとしてイギリス選手権やイングランド選手権、そして2010年にダイヤモンドシリーズを開催した競技場である。また近年は、数多くの音楽コンサートやその他のイベント会場ともなっている。その競技場に、今大会はインクルーシブスポーツの一つの形のモデルとして、下図のようにIAAFダイヤモンドシリーズとIPCグランプリファイナルの看板が設置された。



電光掲示板下：IAAFダイヤモンドシリーズ看板
トラック内側：IPC陸上競技看板

3-2-3 周辺仮設施設・設備状況

競技場の外には、下図のように特設施設が並んでいた。まずイギリス陸上競技連盟のブースが目をつけた。



イギリス陸上競技連盟特設ブース

中に入ると歴代のオリンピック、パラリンピックのメダリストの活躍を紹介する数多くのパネル展示があった。年代順に展示されており、オリンピックとパラリンピックを分けておらず、同等として称賛されているような展示の仕方であった。我が国においては、大規模な陸上競技大会の際に(公財)日本陸上競技連盟が展示ブースを設けることがあるが、このようにパラリンピックの選手のことを取り上げたことはこれまで一度もないと思われる。



オリンピック・パラリンピックのメダリストたちの年代ごとに展示された写真パネル

また、陸上競技の広報、普及、次世代選手育成にもつながるであろうと思われる子どもを対象にした陸上競技体験コーナーがあった。短距離走を体験できるカラフルに彩られたトラックや跳躍や投擲種目を体験できるブースがあり、幼い時から、陸上競技に関心や興味を集めるような体験型の特設コーナーが設置されていた。



子ども対象の陸上競技体験コーナー

その一方で、大会観戦中の合間に家族連れや気のあう仲間が集いやすい雰囲気のカフェコーナーがあったり、陸上競技大会の観戦ツアーやトレーニングキャンプを扱う、地元陸上競技協会とタイアップしたツーリストのコーナーなどがあった。



会場内カフェ・レストランコーナー

4. 障害者陸上競技連団体と日本陸上競技連盟とのインクルーシブスポーツの視点からの課題

今年、東京パラリンピック50周年を迎えるが、我が国の障害者スポーツの幕開けは、1964年の同大会開催を起点としている。そして1998年の長野パラリンピックを契機として、それまでリハビリテーションやレクリエーションの一環としての手段的スポーツから競技スポーツとしての目的的スポーツへ次第に転換していった。一方、障害者陸上競技の団体としては、1984年に日本盲人マラソン協会が設立し、次いで1989年日本身体障害者陸上競技連盟が設立、1999年日本知的障害者陸上競技連盟設立、2002年日本聴覚障害者陸上競技協会が設立した。そして各団体がそれぞれ

に(公財)日本障害者スポーツ協会並びに日本パラリンピック委員会に加盟をしており、各主催事業においては横の連携はほぼ皆無に近い状況である。さらに、1925年に設立した現在の(公財)日本陸上競技連盟との連携もほとんど見られない。

根本的な課題として次なるステージは、健常者中央競技団体との統合化であろう。既に国際テニス連盟は、国際車椅子テニス連盟を傘下に抱えている。つまり健常者スポーツと障害者スポーツが統合されているのである。今のところ陸上競技界ではそのような動きはないが、そう遠くない将来にそれが実現することを願う。国内においては、まず前記4団体が統合し、その後(公財)日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。もしそれが実現されれば、競技会運営役員及びスタッフ、日常練習活動のための指導者不足等、慢性的な人員不足はかなり解決され、障害者のみならず陸上競技の振興発展につながることになるであろう。欧州では、障害者スポーツはすでに特別なものではなくアダプテッド・フィジカル・アクティビティ¹⁸⁾として包括され、障害者のみならず幼児、高齢者、妊産婦、病虚弱者、また運動が苦手または不得意だと思っている人、肥満を解消したいと思っている人等様々な人を対象としたスポーツとして行われ、地域スポーツとして、あるいは総合型クラブという形態をとり発展している。¹⁹⁾一般スポーツの一つの 카테고리として各競技団体とも連携し、普及強化、振興発展が普通に行われている。我が国においてもそのようなことが着実に浸透していくことを期待したい。

5. まとめ

本研究をまとめると以下ようになる。

- ・世界的レベルの陸上競技界におけるインクルーシブスポーツとしての象徴として、Sainsbury's Birmingham Grand prixが開催
- ・インクルーシブスポーツの潮流を受けて、国内ではスポーツ行政の一元化に伴うスポーツ庁設立、及び障害種別陸上競技団体の統合の早期実現と日本陸上競技連盟傘下加盟の可能性

2014年8月24日にイギリス・バーミンガム市のアレキサンダースタジアムにおいて、IAAFダイヤモンドシリーズグランプリとIPCグランプリファイナルが、同時開催された。この大会は、オリンピック出場レベルの選手とパラリンピック出場レベルの選手が、同じ時間同じ場所で同一大会に出場するまさに陸上競技界のエリートアスリートによるインクルーシブスポーツが実現されたと言える。

今後、我が国において国際的に活躍できる選手を継続的に排出していくためには、さらなる競技力向上が課題とな

ろう。そのためには一般競技団体との統合化を図ることが必要であろう。つまり日本パラ陸上競技連盟としてまず障害者陸上競技団体を統合し、その後日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。これが実現すれば、飛躍的に障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。

欧州では、障害者スポーツという捉え方は、過去のものなりつつあり、現在はアダプテッド・スポーツ・アクティ

ビティーと呼ばれ、障害者のみならず幼児、高齢者、女性等々何らかの配慮を擁する人を対象としたスポーツとして統合的に実践され、地域スポーツとして発展している。つまり一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体とも連携し、振興発展がなされている。我が国においても今後そのようなスポーツ環境の整備がなされることを期待したい。

注及び引用・参考文献

- (1) 日本パラリンピック委員会 (JPC: Japan Paralympic Committee) 国際パラリンピック委員会 (IPC: International Paralympic Committee) に加盟する国内を代表する機関。日本パラリンピック委員会は、財団法人日本障害者スポーツ協会の内部組織として、1999年8月20日厚生省の認可を受け、発足した。
- (2) スペシャルオリンピックとは、知的障害児・者のためのオリンピック形式のスポーツ競技を取り入れ、独自理念の沿ったディビジョニングを採用した競技運営で行われている。
- (3) デフリンピックとは、4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であり、国際ろう者スポーツ委員会が主催する障害者スポーツにおける最初の国際競技大会である。夏季大会と冬季大会があり、夏季大会は1924年にフランスで、冬季大会は1949年にオーストリアにおいて始まった。
- (4) 日本財団パラリンピック研究会「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心報告書」2014
- (5) 花村春樹『ノーマリゼーションの父 N.E.バンクミケルセン』ミネルバ書房 1994
- (6) Wolf Wolfenberger 著 富安芳和翻訳『ソーシャルロールバロリゼーション入門—ノーマリゼーションの心髄—』1995
- (7) 草野勝彦「インクルーシブ体育の創造」市村出版2007
- (8) 金山千広「日本におけるアダプテッドスポーツの現状と課題：インクルージョンの普及に伴う学校体育と地域スポーツ」広島大学大学院 2014
- (9) 山本健 海野勇三「山口県におけるインクルーシブ体育の現状と課題」第31回日本スポーツ教育学会発表抄録集2011
- (10) 山本浩二「インクルーシブ体育を目指した取り組みと効果」第32回医療体育研究会第15回日本アダプテッド体育：スポーツ学会第13回合同大会プログラム・抄録集 2011
- (11) 財団法人日本身体障害者スポーツ協会「身体障害者の歴史と現状」1991
- (12) 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会「2014Japan Para Championships」2014
- (13) 井上明浩「障がい者スポーツ団体と中央競技団体との連携に関する研究—スウェーデンにおける現状—」第24回日本障害者スポーツ学会プログラム・抄録集2014
- (14) 谷口弘明「スポーツ組織の一元化（統合）とパラリンピックコーチの葛藤—ノルウェーにおける調査事例から—」第35回医療体育研究会第18回日本アダプテッド体育：スポーツ学会第16回合同大会学会抄録集2014
- (15) 国際陸上競技連盟ダイヤモンドリーグ2014 <http://www.iaaf.org/competitions/iaaf-diamond-league/calendar/2014> (情報取得2014/12/17)
- (16) 国際パラリンピック委員会 IPC 陸上競技2014 <http://www.paralympic.org/athletics/grand-prix-2014> (情報取得2014/12/17)
- (17) アクレディテーションは、当該大会のための選手登録証の発給をいう。障害者スポーツのほぼ全ての競技会においては、クラス分けが現地で最終確認として行われている。知的障害者スポーツにおいては、INAS-FID選手登録カード及びパスポートを用いて本人照会の後、アクレディテーションカードが発給され、大会期間中競技会場の出入りなどその効力を発する。
- (18) スポーツに身体を合わせるのではなく、スポーツをその人の身体状況や発達状況に合わせる。障害の有無にとらわれることなく、幼児から高齢者、妊産婦、体力に自信がない人、スポーツが苦手だと思っている人等、すべての人を対象とした身体活動をさす。
- (19) 同掲書(12)